

船旅と海賊とモダンガール―北村兼子の台湾・広東紀行

根川 幸男

押し出される気分で年末の東京を離れ、吸ひつけられる気分で基隆へ上つたが、ざわついてゐる内地からのんびりとした南國の情緒を味ふだけでも私の胸は踊る。(…)／基隆は雨、呂宋から長駆して全島を荒しまわつた低気圧が、今私たちの上に渦巻いてゐる。

一九三〇年一月、二六歳の北村兼子は、台湾・基隆に上陸した感興をこのように記した。大阪朝日新聞の記者として活躍し、前年ベルリンで開かれた万国婦人参政権運動に日本代表として出席。本を書けばたちまちベストセラー、断髪に洋装で颯爽としたその姿は時代を魅了した。彼女は翌年急逝するが、その若い晩年、台湾の土を二度踏んだ。冒頭の文章は、大阪商船の広報誌『海』一九三〇年七月号に発表された「基隆」の一節である。

『海』は、一九二四年七月に創刊され、一九四三年八月に終刊となるまで一四四冊が発行された。昨二〇一八年、日文研が所蔵する『海』をベースに全冊の復刻出版を行い、監修・解説を担当したが、書ききれないことがいくつもあった。同誌には多くの作家・芸術家たちが寄稿したが、北村兼子はそのもっとも早い一人である。本稿では、『海』創刊の背景とともに、それが単なる一企業の広報誌から文芸誌の性格を持つに至る転機となった、兼子の台湾・広東紀行について記しておきたい。

一 大阪商船と『海』創刊の背景

関東大震災は大きな衝撃と損害をもたらしたが、阪神に拠点を置く大阪商船にとっては大きなビジネスチャンスであった。第一次世界大戦後低迷していた海運業界が、震災直後から人員・物資輸送に活躍。翌一九二四年に南米への移民送出が国策化し、南米・世界一周航路が開設された。

一九二五年には、關^{せき}一大阪市長のもと、市域を拡張し東京を抜いて人口二一万人の日本最大の都市「大大阪」が出現。それは、近代建築や公園などの都市計画、カフェや映画館、並木を闊歩するモボ・モガなど消費文化に支えられたモダニズム空間を生み出す。郊外住宅地に住み、洋装を身につけ街を闊歩し、野球やテニスのようなスポーツを楽しむ、カフェで時間をつぶし、船に乗って異郷・異国へ旅する。震災後に新しく生まれた生活様式は、水辺や船と親和性が高く、海に向かって開かれていたといえる。

こうした時代に新しいメディアとして『海』が登場し、兼子のような新しいメディアにふさわしい新しい女性の書き手が出現した。

二 大大阪のモダンガール

北村兼子は、一九〇三（明治三六）年一月二六日、大阪北区天満に生れた^三。父は漢学者の北村佳逸。祖父は京都亀岡の儒学者・北村龍象という学者一家で、長女であった彼女は幼少より漢学教育を受けた。一九二〇年、梅田高等女学校（現・大阪府立大手前高等学校）を卒業。大阪外国語学校別科英語科（現・大阪大学外国語学部）を経て、二二歳の時に初の女子学生として関西大学法学部法学科に入學。大学二年の時、大阪朝日新聞社の雑誌『婦人』に発表した

論文が注目されるや、同紙の社会部記者に採用された。『週刊朝日』『婦人』『グラフ』などに記事を発表。わずか一年ほどで花形記者となったが、「スキャンダル」がもとで同社を退職しフリーランスとなる。英語・ドイツ語に堪能だった兼子は、一九二八年にハワイ・ホノルルで開催された汎太平洋婦人会議に出席。また、翌一九二九年にベルリンの万国婦人参政権大会に日本代表として出席し、ドイツ語で演説して出席者たちの喝采を得た。

兼子は、『海』に少なくとも三編の記事を寄稿している。前掲の「基隆」、「砂湯」（一九三〇年一〇月号）、「廣東丸」（一九三一年一〇月号）である。これらのうち「基隆」と「廣東丸」から、兼子の旅の足取りをたどってみよう。

一九三〇年一月、兼子は「婦人文化講演会」講師の一人として台湾を訪れた。先の引用に続くのは次のような記述である。

ジャンク船の三原色が古代味を帯びて波間に浮動する。／細い糸のやうな銀線が、山の緑に煙つて夏山煙雨の一巻を展げる。／築山のやうに青淡色の海からつき出てゐる。私たちは久しぶりで陸の緑をみた（『海』一九三〇年七月号）。

水上を進むジャンクを美しいと思いつつ、「人間は陸上動物だ」としみじみ感じる。彼女が乗船した船は九六五五総トンの大和丸。近海郵船がイタリアから購入した中古客船である。「船が動揺して胃袋が緊縮する」と、やはり船酔いに苦しんだらしい。それでも彼女は船中五〇枚の原稿を書き上げたという。「人間は陸上動物だ」というのはその上での感興である。

「基降―私は横一文字の身体を、縦一文字にした。／基陸と聞いて、現金な元気が出る。／基降水望―太平洋航路でホノル、をみつけた旅人は、オアシスで陸の緑に吸ひつけられる。／それと同じやうな考へが、いま私に來た。／人間は陸上動物だ。／私はしみ／＼と思った。水の上、波の間、幾日かして緑をみるよるこびは、恐らく筆や口では出ぬ境地（同）。」

「横一文字の身体を、縦一文字にし」、洋上で得た身体感覚で、陸上を見つめなおす。それを「筆や口では出ぬ境地」と感嘆する。

上陸後、鉄道で台北へ向かった兼子は、広野に悠然と立つ水牛を見つける。

この哲人は何を教へてくれるか。／汝らモガは頭だけが近代科学に発達してゐるが、浅薄な学説の笛でダンスを踊つてゐるのだ。落ちつけ！落ちつけ、汝の脚をして確と地の上に立たしめよと（同）。

車窓からみた水牛との会話に託し、得意の政治問題を持ち出すものの、兼子の足元はまだふらついている。

三 海賊とモダンガール

次に「廣東丸」である。

汽車にゆられて廣東丸の横腹まで／台湾の山から涼しい翠風を送ってくれる。／台湾の人から親切な別れの言葉を贈ってくれる／ドラが鳴った／港を離れる（『海』一九三一年一〇月号）。

一九三二年四月、兼子はふたたび台湾の土を踏む。「廣東丸」は、台湾をめぐる彼女が基隆から厦門へ船出する場面からはじまる。大阪商船の基隆香港線で、この航路に就航していたのが廣東丸であった。廣東丸は、一九二八年に浦賀ドックで建造された貨客船。二八八〇総トンながら、当時竣工したばかりである。兼子が「日本船はただ商船会社だけしか、このラインには就航してゐない」と記すように、台湾から仙頭、厦門を経て香港に至るルートは大阪商船が独占していた。いや、「海賊」すなわちこの海域の真の主が出没するような場所に、大阪商船がひとり乗り入れていたという方が正確かもしれない。

浪が少し出だした。／海賊の話も少し出だした。／食卓の山本氏が妙な顔をしだした。／そして「私は金塊をもってゐますから」といって、海賊の話をきいて最初は笑つてゐた山本氏が、だんだん妙な顔になつて行つた（同）

厦門を出航した夜、船内で海賊の話で賑わい、金塊を持ち込んで乗船している台湾総督府通信部の山本徹氏の顔色がみるみるかわつていく。描写にはユーモアが感じられ、「荷物などに執着がない」という「私」は船長の話を面白がつて聞くのだった。そして、いよいよ海賊の出没するという海域を通過する夜――

海賊は投下資本―すなはち船舶切符によって、船客となって船中に入りこむ。／一等客の方がこはいといふ。(…)／夕餐には、汕頭から乗った新らしいお客さま数名が、食堂に出る。山本氏は顔色青白くなって、海賊かも知れないな眼つきをして彼らたちをみる。／彼等は中山服をきてゐるだけに、日本人でないこと明らかである。それだけに山本氏は不安とみえる。／私が面白がつて―山本さんは金塊をもつていらつしやるんだから。と大きい声でいふと―金塊は梅へすててしまひましたよ。／と実に真面目ないひかた(同)。

海賊という非日常的な話題が、船旅にエキゾチズムと小さな緊張感をそえている。^(四)

海賊の海域を脱した後、兼子は「香港へ着いたら十時の春洋丸に乗って上海へ向かいます」と高らかに宣言する。海賊顔負けの自由奔放なモガぶりだが、「船長始め機関長まで一生懸命に合はさうと努めてくだすつた」と、船のクルーは可愛い女性にはとことん甘い。

春洋丸は兼子がハワイへの往復に親しんだ船である。ところが、香港に入ると、春洋丸の影もかたちもなく、すでに出航してしまっていた。颯爽としたモガを演ずるはずが、置いてけぼりを経てポカンとしている：そんなシーンが想像される。「基隆」の「汝らモガは頭だけが近代科学に発達してゐるが、浅薄な学説の笛でダンスを踊つてゐるのだ。落ちつけ！」と呼応する可愛らしく洒落たオチになっている。

女性と船(＝女性)は相性が悪いのか、春洋丸は東洋汽船が建造した豪華貨客船「天洋丸級」三姉妹の末娘。今を時めくモガは、引退前の老嬢に肘鉄を食わされた形になった。春洋丸に袖にされた兼子はこの後、北へ向かつて中国大陸を縦断する。

ただ、この記事が『海』に掲載された一九三二年八月、兼子はすでにこの世にはない。ヨーロッパ訪問で航空時代の到来を予想した彼女は、パイロットの操縦免許を取得。出発直前の一九三一年七月二六日に腹膜炎で急逝する。「廣東丸」が掲載された『海』が出る前に、彼女はあの世へ旅立ったのである。

註

- (一) 北村兼子の経歴については、大谷渡『北村兼子―炎のジャーナリスト』（東方出版、一九九九）に拠る。
- (二) この「スキヤンダル」について、井上章一は「男性を翻弄する」ふるまいは、まだ時代にさがけすぎていた」と分析している（『解説『ジャーナリズムと性』』『近代日本のセクシュアリティ』19 風俗からみるセクシュアリティ』ゆまに書房、七頁）。
- (三) 長澤文雄「なつかしい日本の汽船」http://jpnships&dgde.jp//company/jpn_builder_048-2.htm#cantomaru_1625 (access: 2018/1/20)
- (四) 稲賀繁美は、海賊行為がつなぐ接触領域に動的な創造性を見出そうとしている（『海賊史観からみた世界交易史・試論』『海賊史観からみた世界史の再構築―交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣、二〇一七、三〇九―三三三頁）。ただ、これは単なる文学的修辭ではなく、実際にこの海域は海賊の出没で知られていた。当時の英字紙には、この海域の海賊を征伐するため、ポイル提督指揮のイギリス海軍巡洋艦二隻を中心とする艦隊が派遣され、海賊の根拠地である二つの村を破壊し、多数のジャンクを焼却したニュースが報じられている（“Cleaned Up: Chinese Pirates’ Lair: British Action”, *The New Castle Sun* No.2903, 1927/03/25, National Library of Australia, <<https://trove.nla.gov.au/newspaper/article/163396638>> [access: 2019/01/25]）。

（国際日本文化研究センター機関研究員）